

副腎偶発腫における  $^{131}\text{I}$ -Adosterol Scintigraphy は、良性副腎結節および Pre-Cushing 症候群の検出に有用であることが示唆された。

#### 4. 肺血流シンチグラフィで肝脾が描出された 3 症例

古橋 哲 此枝 紘一 刈込 正人  
(川口市立医療セ)  
大島 統男 (帝京大・放)

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA を用いた肺血流シンチグラムは、簡便に肺血流分布を知ることが可能な検出法として広く行われている。肝、脾への特異的な集積を示した 3 症例を経験したので報告する。

MAA 注射液 185 MBq を 23 G 翼状針にて投与、RI angiogram および planar 像を撮像した。3 例に肝臓と脾臓への集積が認められたが、腎臓などは描出されず、また angiogram でも肘窩部から肺までにシャントは認められなかった。肺血流シンチグラムにおける肝臓への集積機序として、心臓の右左シャント疾患、静注部位から右心房に至るまでのシャント疾患、肝硬変における肺毛細血管拡張によるシャント、注入前後に MAA が分解変性を生じた場合が考えられる。今回の症例はいずれも MAA の変性による集積と考えられた。注射液製剤はキットに比較して簡便さがあるものの安定性に劣っている。このため細い注射針を用いて RI angiogram に利用した場合、変性をきたしやすい。日常の検査の中で容易に遭遇しうる点で、このような症例のあることを認識するのは重要と思われた。

#### 5. TEW 法を用いた $^{67}\text{Ga}$ 腫瘍検査と撮像開始時間の検討

木下富士美 油井 信春 戸川 貴史  
(千葉県がんセ・核診部)  
柳沢 正道 (千葉県循環器病セ)

分解能の高い低エネルギーコリメータと散乱線除去法である Triple Energy Window (TEW) 法とを併用し、 $^{67}\text{Ga}$  の低い 2 つのスペクトラムのみでの画像作成を試みた。その結果、分解能 (FWHM: 15.0 mm から 10.2 mm)、コントラスト (約 2 倍)・画質も従来法

の中エネルギーコリメータを用いた画像よりも良質な結果が得られた。しかし、TEW 処理によりカウントが 40~70% に減少するなどの欠点もあった。解決策として、物理的、生理学的減衰の少ない投与早期 6 時間での  $^{67}\text{Ga}$  early 画像を試みた。その結果十分な情報量が得られると共に、画質的にも従来法による 72 時間後画像に劣らない画像が得られた。この方法により、6 時間でガリウムの検査ができることは、投与当日に終了することになり、患者の利益は大きい。

#### 6. 慢性膿胸に合併した悪性リンパ腫の 2 症例

斉藤 一浩 藤井 博史 久保 敦司  
(慶應大・放)

慢性膿胸に合併した悪性リンパ腫の 2 症例を経験した。71 歳の女性と 73 歳の男性の患者で、いずれの症例も、膿胸の病期期間は 30 年を超えていた。CT 検査で膿胸病巣に接して軟部腫瘤を認めた。ガリウムシンチグラフィでは腫瘤に一致して強い集積を示し、悪性リンパ腫を疑わせる所見であった。生検の結果、B 細胞型びまん性大細胞型悪性リンパ腫と診断された。

慢性膿胸にはときに悪性病変が合併することがあるが、本邦では、悪性リンパ腫の合併が最も多く報告されており、慢性膿胸に合併する腫瘍性病変の鑑別診断において重要である。慢性膿胸に合併する悪性リンパ腫の大半はびまん性リンパ腫であり、悪性リンパ腫の中でもガリウムシンチグラフィが高い陽性率を示す。このため、病期期間の長い慢性膿胸の患者に腫瘍性病変の合併が疑われた場合、悪性リンパ腫の鑑別のため、ガリウムシンチグラフィが有用と考えられる。

#### 7. $^{67}\text{Ga}$ シンチにて Diffuse abdominal uptake を呈した結核性腹膜炎の一例

橋本 剛史 小泉 潔  
(東京医大八王子医療セ・放)  
阿部 公彦 (東京医大・放)

今回われわれは、ガリウムシンチグラフィにて腹部へいわゆるびまん性集積が認められた結核性腹膜炎の一例を経験した。

Ga シンチグラフィを詳細に見ると、骨盤底部に